



TITLE:

審査結果:「17世紀日本と18-19世紀
西洋の行列式、終結式及び判別式
」に対する審査結果(数学史の研究)

AUTHOR(S):

CITATION:

審査結果:「17世紀日本と18-19世紀西洋の行列式、終結式及び判別式
」に対する審査結果(数学史の研究). 数理解析研究所講究録 2004, 1392:
130-131

ISSUE DATE:

2004-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49756>

RIGHT:

審査結果

*論文「17 世紀日本と 18-19 世紀西洋の行列式、終結式及び判別式」に対する審査結果：

掲載不可

*上記判定に至った事由：

①先行研究の参照に不備がある。

②本論文は『解伏題之法』の内容を現代的な数式で解釈をただけというに過ぎず、その内容に数学史としてのオリジナリティーが認められない。

③数学史の論文として扱うには形式、論証のための手続きの上でいくつかの問題が認められる。

*判定事由に対する補足：

①この論文の内容に関する先行研究としては、佐藤賢一「関孝和の行列式の再検討」、『科学史・科学哲学』第11号(1993年)、pp. 3-13が、全く同一の史料『解伏題之法』と『大成算経』巻17を用いて、同様の議論を展開しています。この論考は佐藤氏の学部卒業論文のダイジェストですが、公刊されておりますので、参照する必要があると思われます。

②については余計な説明は不要と思われます。英文要旨と本文の第一番目の段落を見るだけでも、数学史の論文として何か新しい主張を提示しているようには判断できません。そもそも第一段落で筆者は「……和算研究者の間でもまだ十分に理解されていないように思われる」という記述をされていますが、このような文言を書くこと自体、数学史(和算史)をあまり研究されておらず、数学史は単に啓蒙さえすればよいという態度が見え隠れしていることを如実に示しているようで、審査者の心証をひどく害したことを一言申し添えておきます。

③数学史、しかも近世日本の数学史を主題として論文をまとめるにあたっての、基本的な約束事がほとんど無視されているので、是非再考をお願いいたします。

(1)典拠とした史料に対する「史料批判」がほとんどなされていません。最近、佐藤賢一氏(電気通信大学)や小林龍彦氏(前橋工科大学)などは『関孝和全集』の編集内容には学術的に信頼できないものが多々あることを指摘されています。関孝和に関する和算史の論文を書こうとするならば、『関孝和全集』だけに依拠して論を立てることは非常に危険です。

実際の写本、刊本を手にとって、それらを参照して論を立てなければ信用のおける論考は成立しません。どの写本、どこの本を参照したのかを明記し、史料の内容を一字一句吟味して論を立てていく姿勢が求められます。それが歴史的な論文を書く際の必要最低限のルールです。

(2) 本文3頁において、「われわれは、これは「大成算経」のためのノートとして……と想像している」と述べておられますが、このような「想像」という部分を証拠に基づいて議論していくのが数学史の論文であるはずで、単なる憶測だけで議論が成立してしまうのならば、論文など書く意味がありません。逆に、数学史の論文においては、簡単な線型代数学の教科書さえ参照すれば済んでしまうような内容を延々と書き連ねる必要はないと思われます。(本文第2章の議論など。)

(3) 本文4頁において、「割り算の記号、根号が……見劣りがする」という表現をされていますが、我々は数学史において東西の数学の優劣を決定しようとしているわけではなく、もしそのような意識を筆者がお持ちならば、あまりにも時代錯誤だと判断せざるをえません。西欧のものと比較して、「見劣りがする」、しないという見方だけで和算を見ているとしたならば、そこから得られる結果は数学史としてはあまりにも不毛です。和算家の持っていた意識、時代背景などを歴史的に深く掘り下げ、彼らの内的論理を明確にした上で比較をするならば、それはそれで意味があるのですが、残念ながら、本論文にはそのような問題意識は希薄であると判断いたしました。しかも、西欧の数学の取り扱いにも問題点があるかと思えます。第4章の冒頭で Leibniz について言及しながらその終結式については何も言及されていません。関孝和の業績云々を語るのであれば、「後代に何の影響を与えることのなかった」(?これも本当でしょうか?)とはいうものの、最低限 Leibniz の研究についての内容紹介はあつてしかるべきだと思います。「後代に何の影響を与えること」がなかったから言及しないというのも、歴史の論文としてみるならばおかしい話です。(見方を変えれば、関孝和の業績も、西欧の数学には何も影響を与えることはなかったと言えませんか。それをなぜ我々は主題としなければならないのでしょうか、と反問されませんか。)

(4) この論文には発展的な議論や、今後検討すべき課題が全く示されておらず、これらのものを期待していた審査者は痛く失望いたしました。論文が「尻切れトンボ」で終わっていることは、いかなる分野においても致命的です。和算の内容を現代的な数式に翻訳し直ただけと審査者が評価したのも、このような点を考慮したからに他なりません。

(5) これは老婆心の過ぎた発言ですが、筆者の方はまだ数学史の論考をお書きになった経験が浅いように思われます。是非投稿をなさる前には、不必要で不毛な指摘を審査者から受けぬよう、あらかじめ当該分野を専門とされる方のご助言をいただくようお願いいたします。

以上